Campus

219

全代会の広報誌

Oct. 2019

この大学は森なのか
筑波大学の植生に迫る

あなたのとなりの社会科学
【学類特集】各学類・専門学群を知ろう!

全代会の 2019 年度
全代会活動報告

この大学は森なのか

筑波大学の植生に迫る

筑波大学は森なのか。たくさんの人がそう思うほど、本学は多くの植物に囲まれている。しかし、本学の植生やシンボルツリーについて詳しく知っている人は少ないだろう。本特集では大学施設部と上條教授の協力のもと、構内の植生と個々の植物について詳しく解説する。

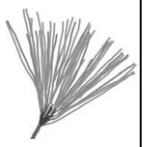
（編集人：軽辺凌太、北澤繁人、鈴木葉菜、中山皓太）

筑波大学の植栽の計画

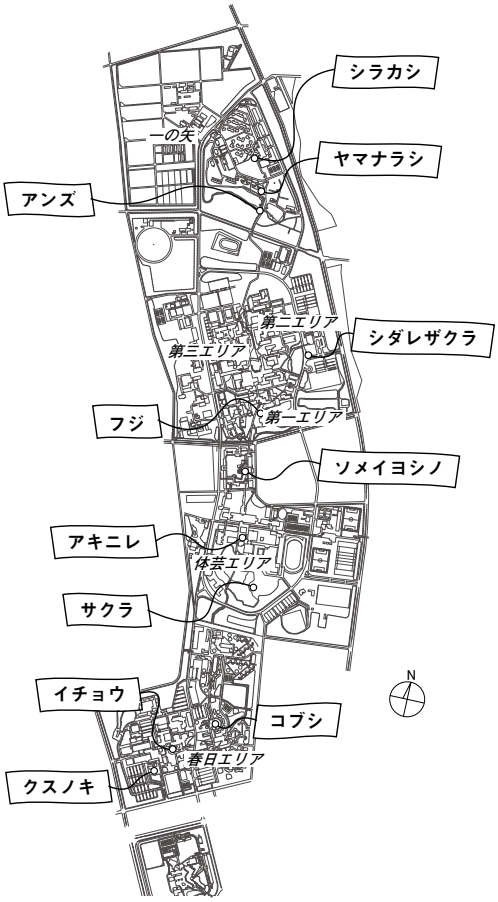
「筑波大学の植生の整備は毎年少しずつ行なわれている」と渡邊保博（わたなべやすひろ）さん（施設部施設企画課長）は話す。開学以前、現在筑波キャンパスがある地域はアカマツ林だったという。構想時からダイナミックで多様性のある自然と建築とが筑波大学の環境形成の二大要素にしようとされていた。そのためキャンパスの敷地面積２５０ヘクタールのうち70ヘクタールを自然地域にしようとしていたが、研究施設などの建物の拡大により30ヘクタールの計画に落ち着いた。

季節感と生活リズムが感じられるキャンパスにするという緑化・景観の計画に基づいて、当初は10万本の落葉樹の植林を計画していたが、つくば市は冬になると「筑波おろし」と呼ばれる冷風が筑波山から吹き降ろすため、大学の北西部を防風林で囲む必要がある。そこで、季節感が強く感じられる常緑樹15万本を加えて、計25万本の樹木を植えたという。

現在、大学構内にて路面が盛り上がっている箇所が多数存在する。これは開学の際に植林した樹木が成長するとともに、道路の下にのびた根が路面を押し上げたためである。このような道路の整備以外には、大きくなり過ぎた樹木の剪定も行っている。「筑波大学は自然豊かであるため、管理を怠ると過ごしにくくなってしまう」と渡邊さんは話す。施設部では快適な学内環境を保つために、修復箇所を調べ、整備を行っている。



シンボルツリー配置図



筑波大学の植生

「大学構内の植生の特徴には様々なものがある」と上條隆志（かみじょうたかし）教授（生命環境系）は話す。例えば、アカマツ林が減り、暗い場所でも育つことができるシラカシなどの常緑樹林が増えている。また、大学構内には多くの植物が生育しているが、平坦なため、筑波山にあるキブシなどの植物は生えていない。

構内の植物の管理には費用がかかり、こまめな木々の剪定は現実的に難しい。また、開学の際に、土や芝を外部から持ち運んで新しく造成した場所と、もとからあった状態のままにしている場所がある。「この2か所では、土地の履歴の違いや土壌の違いから植生にもかなり違いが表れている」と上條教授は話す。

大学構内の植生について話す上條教授

筑波大学植物ツアー

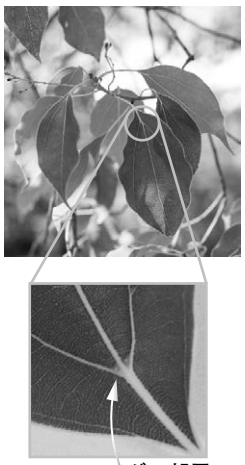
大学構内にある具体的な植物についても、上條教授に話を聞いた。そのうちのいくつかを紹介していく。

まずは、「縛る」という意味のアイヌ語「シナル」を語源とし、左右に歪んだハート型の葉が特徴的なシナノキだ。「通常は東北や北海道に多く生える木だが、筑波大学にも植えてある。今年は実のなりがいい」と上條教授は話す。実はプロペラのような形をした付属物を持ち、それによって、風にふかれて飛ぶこともある。また、この付属物は花の段階では白く、虫を引き付けるのに役立っているという意見もあるそうだ。

次は、最もポピュラーな樹木の一つだというクスノキだ。独特なにおいを持つことから、防虫剤を作るのにも使われる。クスノキの葉には「ダニ部屋」と呼ばれるいくつかの突起があり、その名前の通りダニが住んでいる。このダニが葉についた食植性のダニなどの害虫を駆除するという説もあるが、明確なことはまだ分からないと上條教授は語る。

①シナノキ

シナノキの実


②クスノキ
ダニ部屋

③エゴノキ

④ケヤキ

もともと大学構内に生えているエゴノキについても紹介してもらった。有毒植物で、実や汁を口に入れると、のどの痛みがしばらく取れなくなる。「果肉の中心部は毒が少なく、ヤマガラという鳥やネズミが、その部分を取り出して食べる」と上條教授は言う。また、それらの動物が固く丈夫な種を冬に取っておこうと埋めて、そのまま忘れてしまい、そこから発芽することもあるそうだ。

最後に紹介するのは、つくば市の木でもあるケヤキだ。「木目がきれいで、太い原木は高値で扱われる」と上條教授は話す。大きく成長する木で、あと何年か経つと管理するのが難しくなるそうだ。その種子は枝についたまま秋を迎え、小型の枯れた葉と枝ごと風に飛ばされる風散布型で、「秋の風が強い日には、くるくると回りながら舞い上がり、構内の建物の上を越すほど高く飛ぶ。秋になったら是非見てほしい」と上條教授は語る。

ケヤキについて解説する上條教授

自由闊達にして愉快な学類

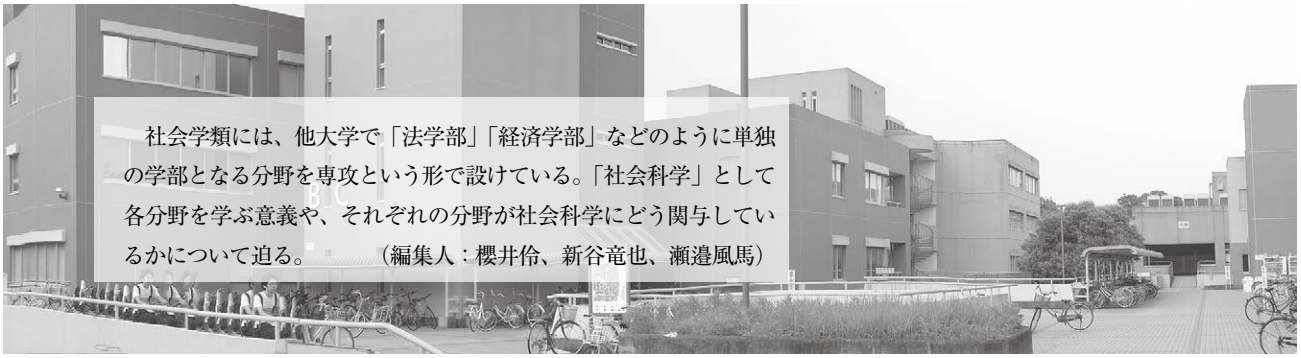
「社会学類は、法学、経済学、政治学、社会学の視点から現代社会を分析する教育拠点であり、主専攻の垣根を越えて社会科学の基礎を広く自由闊達に学ぶことを奨励している」と平沢照雄（ひらさわてるお）社会学類長（人文社会系）は話す。また、「グローカル」な視点を持つ学生の育成を目標としている点も特徴である。すなわち、グローバルな視点とローカルな視点のどちらも大切にした教育をしているということだ。「この2つをどう両立させるかについては様々な意見があるだろうが、例えばグローバルに考えローカルに行動するという形があるだろう」と語る。

平沢学類長は、グローバル競争時代における地域貢献企業によるローカル経済の活性化に注目している。特に日本の中小企業がどのような歴史をたどり、どのような形で地域に貢献するに至ったかについて実証研究を進めている。

経済学について、平沢学類長は「社会生活の基盤となる部分を客観的に分析する点に魅力がある」と話す。経済学は近代以降、市場経済が社会システムの中核となるなかで、学問として確立され発展してきた。さらに、今日のグローバリゼーションの基盤には経済のグローバル化があり、それを分析する点でも経済学は魅力的な学問であるという。

「社会科学を学んで社会に出ていくのとそうでないのとでは、社会の見方が大きく異なる。社会学類の講義を受けることで、これまで意識していなかったことを意識してほしい」

「グローカル」について語る平沢学類長



社会学類には、他大学で「法学部」「経済学部」などのように単独の学部となる分野を専攻という形で設けている。「社会科学」として各分野を学ぶ意義や、それぞれの分野が社会科学にどう関与しているかについて迫る。　（編集人：櫻井伶、新谷竜也、瀬邉風馬）

政治から社会は見える

「普段当たり前だと思い込んでいることは、宿命的に決まっている訳ではない。政治の世界は時に恣意的であり、時に意図的である。政策をただ受け入れるのではなく、誰がなぜそのような政策を作っているのかを考えると面白い」と明石純一（あかしじゅんいち）准教授（人文社会系）は語る。

明石准教授は、人の国際移動の背景、過程、帰結を研究している。例えば、自分たちの町に海外から難民を受け入れる場合と、被災した県外の日本人を受け入れる場合とでは人々の感じ方に違いが生じる。では、その違いはなぜ生じるのか。社会科学では、なんとなくそのようなものだと受け入れるのではなく、疑問を持ち、その疑問に対して仮説を立て、推論する。

政治が世の中に与える影響は目に見えにくいが、どんな人でも政治に巻き込まれている。ある政策によって得をする人もいれば損をする人もいる。時の政策の中身がどのような価値観やイデオロギーに起因するのかを解釈していくことが、人間や社会全体への理解につながっていく。

「選挙権を得たばかりの十代、二十代は投票経験が少なく、政治をどこか遠い存在のように感じやすい。しかし、政治の影響を身近に、つまり生活の中にも感じ始めると、政治学の学びは一気に楽しくなり、また役にも立つ」と明石准教授は話す。

自身の研究について話す明石准教授

4主専攻の違いは「視点」

「社会学類に共通するのは、社会現象や人間の行動について社会的観点から分析することだ」と、土井隆義（どいたかよし）教授（人文社会系）は話す。社会学類で学ぶことで、常識にとらわれずに社会を見ることができるようになるという。土井教授は「社会学類では、技術を学ぶというよりも、客観的な目を養ってほしい」と話す。社会学類には4つの主専攻が存在するが、主専攻間の違いは「視点」だという。それぞれの専攻に関してあくまで対象は現代社会であり、その現代社会を見るときの側面や視点が違うということだ。

土井教授が専門とする社会学は人間の行動すべてを対象とし、特定の対象を持たない。一口に社会学といっても犯罪社会学や教育社会学などがあるが、土井教授によると、社会学は「方法」が重要な部分であり、対象は自分の関心のあるものでいいのだという。その例として土井教授は、「ケーキとナイフがあるとしたら、社会学で大事なのはどんなケーキを選んでもよいが、そのケーキを切るのに適したナイフの方はどれかを十分に吟味しなければならない」と話す。

土井教授は、「社会学は解放の学問」だとも話す。社会学を学ぶことで社会を一歩引いたところから見ることができるという。「そうして得られた視点によって社会の仕組みを理解するとともに相対化もでき、より過ごしやすい豊かな人生を送ることができる」

社会学について話す土井教授

解釈の自由が面白い法学

「学生さんでも自分で真剣に条文を読んで、自身の解釈を示すことが許されている。法律を理解するだけでなく、その先があるということを分かってほしい」と宮坂渉（みやさかわたる）准教授（人文社会系）は語る。

法律の解釈には、法律を作った人や裁判所が示す解釈など、一定の基準とされる解釈がある。しかしそれらの解釈だけが正解という訳ではなく、実際には解釈の可能性はもっと広く、他の解釈を考えることは自由だという。

なぜそのように解釈するのか。その解釈をしたとき、法律はどのように社会の問題を解決するのか。社会で起きている物事を認識し、仮説を立て、検証する。こうした思考実験を繰り返し、社会の問題を解決していくことが、社会科学を学ぶ場として社会学類が果たすべき役割だと宮坂准教授は考えている。

宮坂准教授は古代ローマ法について研究を行っている。古代ローマ法は実は近代日本における民法のご先祖様に当たる。日本の法律の大本は、明治維新の時代に当時のヨーロッパやアメリカの法律を参考にして作られた。特に民法は古代ローマ法に由来するヨーロッパ各国の民法を模しており、直近の民法大改正を経ても根本的な枠組みは今もなお残されている。

古代ローマ法が作られた時代は、科学が進歩した今日とは大きく異なる。しかし、人間の生活は根本的なところではそれほど変わっていない。人は特定のパートナーと関係を結び、子供は親から生まれる。また、人は財産を所有し、交換や継承をする。そして、不変的な人の営みに必要とされる法律もまた変わっていない。「古代の法律は、現代の法律の根本とは何かを示し、現代における法律の糧となっている」と宮坂准教授は話す。

法学の魅力を語る宮坂准教授

全代会の2019年度

みなさんにとって「全代会」とはどのような存在だろうか。「なんか真面目そう」「何してるか分からない」「何かしらの権力を持ってる」など、それぞれの方がそれぞれの印象を持っているだろう。しかし全代会がどのような組織であり、どのような取り組みをしているのか正しくご存知の方は少ないはず。本特集を通じて今年度の全代会がどのような取り組みをしていくのか知っていただければ幸いである。

（編集人：北村夏海、稲富拓人）

今年度の全代会

今年度の全代会の大きな特徴として、副議長の2人がどちらも常任委員会の委員長と兼任していることが挙げられる。その副議長の2人、そして今年度の全代会を取りまとめる全代会議長団の3人に、今年度の全代会について話を聞いた。

前年度を振り返り、今年度議長団が大きな課題として主に挙げたのが、全代会で複数回発生した本会議の流会、出席者数の著しい減少により深刻化した各委員会における人員不足、そして各組織間での情報共有が適切に行われなかったことの3点だ。前年度はこれらが原因で各組織の本来の活動を行うことが困難であったという。これらの課題点への施策について、今年度の全代会議長、副議長を務める議長団の3人に、抱負や心構えを聞いた。なお、副議長の2人には、常任委員会の委員長と副議長を兼任した意図についても聞いた。

2019年度の議長団・委員長陣

議 長
瀬邉 風馬（せべ ふうま）（日本語・日本文化学類２年）

副議長・広報委員長
軽辺 凌太（かるべ りょうた）（地球学類２年）

副議長・調査委員長
三浦 貴也（みうら たかや）（化学類２年）

総務委員長
加藤 駿人（かとう はやと）（物理学類２年）

学内行事委員長
竹内 織洋（たけうち おりひろ）（地球学類２年）

教育環境委員長・生活環境委員長
関口 東亜（せきぐち とうあ）（比較文化学類２年）

議長に聞く

今年度の全代会議長を務める瀬邉風馬（せべふうま）さん（日本語・日本文化学類2年）は、今年度の全代会について「まずは座長団の本会議への出席率を上げたい」と話す。前年度は座長団の全代会本会議への出席率が非常に悪く、例年はほとんど発生しなかった流会が1年に3度発生した。流会が続くことによって本会議に参加している座長団の不満も募り、全代会全体の雰囲気も悪化していたという。

瀬邉さんは今年度既に全代会本会議への座長団の出席率を向上させるための策を講じてきたという。具体的な策として瀬邉さんは新歓時の新入生に対する全代会の説明の徹底を挙げた。全代会とは何か、どの程度の拘束時間があるのか、などの説明を行い新入生の全代会への理解を深めた。

次に瀬邉さんは研修会の時期を変えたことを挙げた。例年、第一回本会議の後に開かれていた座長団を対象にして行う研修会を、今年度は第一回本会議の前に実施した。これにより、座長団が会議に出席することの重要性を座長団の1年生に認識させた上で、第一回本会議を開催することができた。

他にも、会議の時間短縮のために資料の朱入れは質疑応答の時間で行わずに紙面で行うことや、本会議前に「Slack」上で事前会議を行うなどの議事進行上の工夫により、現在会議に出席している座長団が参加し続けられるような環境づくりも同時に進めていきたいと瀬邉さんは話す。

今年度改善したい点として瀬邉さんは、さらに各委員会での人員不足を挙げる。前年度の総務委員会では、委員長に負担が集中し、時には1万字に達する全代会本会議、意見聴取会などの議事録を1人だけで作成していたという。同様の人手不足は総務委員会だけでなく、教育環境委員会や広報委員会などでも発生していたとのことだ。今年度は各委員長に、各委員会の構成員に適切な量の仕事を与えることを呼び掛けている。また委員が行った作業について適切な評価を与えることによって、委員のモチベーションを維持することも重視しているという。これらの対策によって全代会では本会議出席者が平均50人程度に増加した。また、各委員会でも活動人数が大幅に増加し、前年度から状況はかなり改善されたという。

今年度議長を務める瀬邉さん

副議長に聞く①

軽辺副議長

全代会副議長の軽辺凌太（かるべりょうた）さん（地球学類2年）は副議長と広報委員長を兼任している。広報委員会は全代会の広報の中核を担っているため、副議長という役職に活かしたいと考えているという。また、軽辺さんは、前年度から関わってきた全代会の活動について、副議長という責任ある立場においても貢献したかったとも話す。

副議長の具体的な活動として、軽辺さんは今年度の全代会本会議の出席率向上に取り組んでいる。本会議の出席メール提出の催促を行う、会議の予定を早い段階で提示するなどの策を講じている。

最後に副議長としての抱負を聞いた。「全代会構成員の皆さんに会議に出席していただくには全代会の雰囲気をより良くすることが大切であると考えている。そのために『真面目ながら楽しい全代会』にしていきたい」

副議長と広報委員長を兼任する軽辺さん

副議長に聞く②

三浦副議長

今年度の全代会副議長の一人である三浦（みうら）貴也（たかや）さん（化学類2年）は、副議長と調査委員長を兼任した理由として、他の委員会との連携の強化を図ることを挙げた。前年度の全代会では委員会間の情報共有不足が顕在化していた。三浦さんが所属する調査委員会は特に他の委員会との連携を必要としている委員会であり、「自分が副議長として各委員会を繋げる役割をしなければならない」と三浦さんは話す。

今年度目指す全代会副議長の在り方について、三浦さんは全代会構成員が率先して動くことができるように、適切な情報共有を行うための架け橋となりたいという。また、自ら率先して活動を行う昨年度の議長・副議長の姿勢は受け継ぎたいそうだ。「あくまでも長は構成員に仕事を割り振り自らはピンチヒッターとして動くべきだと考えている。」

副議長と調査委員長を兼任する三浦さん

全代会活動報告

3月
18日 全代会報告会

4月
17日、18日、24日 委員会説明会

5月
6日 全代会研修会

全代会報告会

日時：3月18日（月） 14時
場所：本部棟5階大会議室
出席：18年度議長団、各委員長、副学長・教職員等

○実施内容

「副学長等と全代会構成員との懇談会（全代会報告会）」は、議長団と各委員会の委員長が1年間の全代会の活動を大学へと報告する場である。18年度議長の四家武彦（しけたけひこ）より18年度の活動の報告と反省がなされた。教職員からは、特に調査委員会が行った全学生対象の教育生活環境アンケートの結果について多くの質問がなされた。また、活動の報告だけでなく、副学長を始めとする教職員と議長団・委員長らが全代会の今後の活動方針についても話し合った。

最後に教職員からの講評として、全代会と大学間の連携を強化していきたいという旨が述べられた。

学生と教職員が対面して話し合う

議長団選挙

第一回本会議の様子

○2019年度の議長団選挙

第一回本会議では、議長として、瀬邉風馬（せべふうま）（日本語・日本文化学類2年）が立候補し、信任投票の結果、選出された。副議長選挙では、副議長として軽辺凌太（かるべりょうた）（地球学類2年）、三浦貴也（みうらたかや）（化学類2年）が立候補した。信任投票においてどちらも選出された。

第一回本会議

日時：5月8日（水） 18時30分
場所：3A204
出席：53人

○議長選挙

【立候補者】
日本語・日本文化学類2年　瀬邉風馬

【投票結果】（採決時の出席者は53人）
信任　49　不信任　1
保留　3　無効票　0

全代会構成員の過半数（38票以上）を得票したため、瀬邉が議長に選出された。

○副議長選挙

【立候補者】
地球学類2年　軽辺凌太

【投票結果】（採決時の出席者は53人）
信任　46　不信任　2
保留　4　無効票　1

全代会構成員の過半数（38票以上）を得票したため、軽辺が副議長に選出された。

【立候補者】
化学類2年　三浦貴也

【投票結果】（採決時の出席者は53人）
信任　47　不信任　1
保留　2　無効票　3

全代会構成員の過半数（38票以上）を得票したため、三浦が副議長に選出された。

8日
第一回本会議

6月

5日
第一回意見聴取会

12日
第二回本会議

13日
茶話会

7月

10日
第三回本会議

11日
第一回
学生組織連絡会

委員会説明会

日時：4月17日（水）、18日（木）、24日（水）18時30分
場所：1C406
出席：18年度議長、19年度各委員長、新たに全代会構成員となる学生

○実施内容

今年度新たに全代会の構成員となる学生へ向け、各委員会が業務の説明を行った。構成員は、基本的に委員会に所属することになるためだ。説明会では、個別相談ブースも設けられた。

説明を受ける新入生たち

全代会研修会

日時：5月6日（月）14時
場所：1D201
出席：全代会構成員
文化系サークル連合会、
芸術系サークル連合会、
体育会執行委員会、
スポーツ・デー学生委員会、
学園祭実行委員会、
学生生活課職員

○実施内容

新たな全代会構成員に向け、研修会が行われた。加賀信広学生生活支援室長が研修会の始めに挨拶を行った。第一部では、学内の学生組織の代表者が、組織の概要と全代会との関係について説明した。また、学生生活課職員も同様に説明を行った。

第二部では、講習会と題して、情報リテラシー講習、全代会室の利用方法の説明が行われた。

第三部では、本会議を想定した模擬会議を行った。実際に会議に参加する前に、会議の流れや発言の仕方について研修する目的で行われた。

模擬会議では、議題として「一の矢学生宿舎周辺の街頭設置に関する要請」が用意された。実際の会議と同様に質疑応答の後、採決を行った。新入生からも多くの質問がなされた。

最後に、本会議で承認された議案が大学側に提出された後の流れについて説明があった。

模擬会議の様子

第一回意見聴取会

日時：6月5日（水）18時30分
場所：5C216
出席：41人

議題①
『令和2年度学園祭開催に関する要請』
議題②
『冷房期間延長の要望』

○議題について

議題①の「令和2年度学園祭開催に関する要請」について、学園祭は大学の学年暦に掲載される行事であるため、学園祭開催の約1年前であるこの時期に審議される。

議題②について、例年、冷房期間が6月末から9月上旬までと設定されている。しかしながら冷房期間外に暑さが厳しい日や不快指数の高い日が多い。そのため、学生の快適な授業環境を確保し、熱中症等の暑さによる被害を予防することを目的として冷房期間を延長する要望について審議を行った。

審議の中では、冷房の延長期間に関する質問や、予算の観点から議題が実現する可能性はどの程度あるのかといった質問が出て、活発な議論が行われた。

第一回意見聴取会の様子

第二回本会議

日時：6月12日（水）18時30分
場所：5C216
出席：51人

議題①
『令和2年度学園祭開催に関する要請』
承認……51
否認……0
保留……0
→全会一致で可決

議題②
『冷房期間延長の要望』
承認……49
否認……1
保留……1
→賛成多数で可決

○議題について

第一回意見聴取会の内容を踏まえて、引き続き「令和2年度学園祭開催に関する要請」と「冷房期間延長の要望」が審議された。第一回意見聴取会でおおむね審議が尽くされていたため両議題とも多くの意見は上がらず、採決に移った。両議題ともに賛成多数で承認され、全学の総意として大学へ提出された。なお、「冷房期間延長の要望」に関しては予算面の懸念を示す意見があり、今後生活環境委員会管轄のもと議論を深めることとなった。

第二回本会議の様子

学長と全代会構成員との懇談会（茶話会）

日時：6月13日（木） 18時30分
場所：第一エリアA棟食堂
出席：全代会構成員、
学長、副学長、教職員等
学園祭実行委員会
スポーツ・デー学生委員会

○実施内容

茶話会は、学長と全代会構成員の顔合わせの場として毎年行われており、学生が学長に直接意見を伝えることができる機会となっている。今年度は全代会構成員と事前に応募した一般学生が参加し、永田恭介（ながたきょうすけ）学長以下教職員臨席のもと、二部形式で開催された。

第一部では全代会の活動報告として、今年度の方針および、すでに活動を始めた内容について報告した。学長からはすでに具体的取り組みを始めていることへの評価とともに、新カリキュラムの運営について全代会と協力して進めていく方針を明らかにした。

第二部では立食形式の懇談会で、学生と教職員がざっくばらんに話し合い、率直な意見を伝える場となった。

向かい合って座る学生と教職員

第三回本会議

日時：7月10日（水） 18時30分
場所：5C506
出席：48人

議題
『新入生歓迎特別委員会　設立の報告』
承認：48
否認：0
保留：0
→全会一致で可決

○議題について

新入生歓迎特別委員会は、新入生歓迎時期に起こる特有の問題に対処するために設立される特別委員会だ。各学類・専門学群の新歓団体への情報共有や支援を行う。委員長は中村紗彩（なかむらさや）（知識情報・図書館学類2年）が務める。

主な活動内容は各学類・専門学群の新入生歓迎団体が行う活動の支援、および筑波大学紫峰会基金への援助金申請補助、合格発表日の学内巡回や宿舎入居等の支援、安全対策推進委員会に関わる活動等がある。

また、新特委は学内学生組織を統括する役割も持つ。学園祭実行委員会、スポーツ・デー学生委員会、宿舎祭実行委員会、各学類・専門学群の新歓団体の連携が円滑に行われるよう、全学規模の新歓情報の提供を行う。

第三回本会議の様子

第一回 学生組織連絡会

日時：7月11日（木） 18時30分
場所：5C301
出席：議長、学内行事委員会
新入生歓迎特別委員会
学園祭実行委員会
スポーツ・デー学生委員会
宿舎祭実行委員会
文化系サークル連合会
芸術系サークル連合会
体育会執行委員会

○実施内容

学生組織連絡会は、学内の様々な学生組織の情報共有の場として年に2回設けられている。今回は各学生組織の進捗報告ののち、活動に参加しない構成員にどのように対処するか、他大学などとの連携をどのように行っているかなど、学生組織間で問題となっていることについての議論を行った。

また、来年度開催される東京オリンピックに伴い、土曜日に授業が行われることに関して、体育会をはじめとする課外活動や学園祭の準備などに大きな影響が出るとの意見が上がり、今後各学生組織が連携して対応を考えていくことで一致した。

第一回学生組織連絡会の様子

コラム 生活環境委員会・教育環境委員会 活動紹介

生活環境委員会では、学生の生活環境に関する問題を扱う。直近の活動として、放置自転車の撤去、学内ループ道路やペデストリアンデッキの破損状況の調査、文化系サークル会館のトイレ改修依頼等を行った。

教育環境委員会は、学内の教育に関する問題を扱い、大学側に改善策を提案している。直近の活動として、専門導入科目の事前登録制度廃止の要望、TWINSとKdBなどの学生支援システム改善の提案等を副学長や、教育推進部に行った。

現在、期限を設けずに教育生活環境に関する学生の身の回りの問題点について調査を行っています。学生の皆さんのご意見をお聞かせください。

回答フォームはこちら←

生活環境委員会が実施した放置自転車撤去の様子

専門委員募集中！

委員会	活動日	活動内容
総務委員会 事務部門 / 情報部門	火	全代会の活動の補佐及び情報の管理を行う
学内行事委員会	木	全代会と学内の行事を運営する関係組織を繋ぐ
教育環境委員会	火	全学的な教育環境に関する問題について取り扱う
生活環境委員会	木	学生の生活に関する問題について取り扱う
調査委員会	月	全代会として取り組むべき問題の調査・報告をする
広報委員会 編集部 / 制作部	木	全代会の広報と学生に有益な情報を発信する

詳しい情報はこちらから
↓全代会 HP ↓
https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/
ご連絡はこちらへ：zdk@stb.tsukuba.ac.jp

Campus 全代会の広報誌 Oct. 2019
No. 219
2019年10月1日発行

表紙制作者より

広報委員会に入って一番の大仕事だった。CGに触れる機会のなかった私でもできるか最初は不安であったが、なんとか形になって一安心だ。今後も定期的にこのような表紙を作れるよう精進したい。【北川汰知】

広報委員会に入って約半年が過ぎた。はじめは自分にできることがあるのだろうかと不安に思っていたが、頼りになる先輩方や同学年の委員の支えを受けて楽しく活動できている。これからもCampusがよりよくなるように働いていきたいと思う。【村松真緒】

記事制作者より

初めて定期号の記事を書いたが、思ったよりも丁寧に記事が作られていることを知り、驚いた。取材先の方の伝えたかったことが読者に伝わること、そして、より多くの方にこの広報誌が読まれることを願う。【新谷竜也】

編集後記

今年度から新しく広報委員会に新入生が入ってきた。2年前には私も彼らと同じように、読み合わせまでの業務で大仕事と感じていた。企画を練り、取材をし、記事を書き、何度も校正を重ね、記事を完成させる。これらの業務で十分に満足していた。そんな私が編集長という立場になった。それぞれの箇所を担当する広報委員から校正をした記事を受け取って編集作業をし、一つの広報誌にまとめあげる業務をしている。

私は今、編集後記と銘打ってこの文章を打っている訳だが、実際にはここから先の業務の方が編集長としては大変なのである。微調整と話し合いの繰り返しだ。これはどちらが素晴らしいかとかいう話ではない。各々の役割と責任を果たして初めて大きな物事は成し遂げられることを忘れてほしくないだけだ。【十川澄】

BACK NUMBER

Campus No.218 2019/04/01
特集：平成の変遷

広がる看護、繋がる看護／全代会概論
全代会活動報告

Campus No.217 2019/01/08
特集：冬を上手に乗り越える

災害大国の羅針盤／知識の海に潜る
全代会活動報告

Campus No.216 2018/10/02
特集：筑波山再考

共生社会の実現に向けて／全代会の2018年度
全代会活動報告

Campus No.215 2018/04/01
特集：「フォトジェニック」を探しに行こう

「資源」は「農業」だけじゃない／全代会概論
全代会活動報告

バックナンバーは1学食堂内のボックスで配布しています。
ウェブ版『Campus』公開中 https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/

STAFF

編集人	十川澄	
発行人	軽辺凌太	
表紙デザイン案	村松真緒	
編集委員	新真澄	多田菜月
	稲富拓人	近森正太郎
	軽辺凌太	中山皓太
	北川汰知	西堀涼香
	北澤繁人	村松真緒
	北村夏海	
	櫻井伶	
	新谷竜也	
	鈴木泰我	
	鈴木葉菜	
	鈴木瑠夏	
	瀬邉風馬	
	十川澄	
	高畠亮	
発行	全学学類・専門学群代表者会議	
	広報委員会	

https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/
zdk@stb.tsukuba.ac.jp

広報委員会では随時専門委員を募集しています。興味のある方は上記のメールアドレスまでご連絡ください。

Campus